

平成26年度徳島大学附属図書館読書週間行事 第2回「TOKUDAI 川柳」

入賞者表彰式 選考委員会委員長講評

総合科学部教授 石川榮作

平成26年度徳島大学附属図書館読書週間行事として実施された第2回「TOKUDAI 川柳」(テーマ「本のある風景」)において入賞された学生の表彰式が、蔵本キャンパスでは1月6日に、常三島キャンパスでは1月15日に行われました。私は選考委員会委員長として常三島キャンパスでの表彰式に立ち会わせていただきました。そのときの講評が好評でしたので、それをもとにメールマガジン「すだち」用書き改めて公表したいと思います。ただ入賞作品の個々の講評については、すでに本メールマガジン「すだち」において別のかたちで公表していますので、詳細はそちらをご覧ください。ここでは川柳と読書との関係、教養とは何か、読書の究極の目的などについて、私見を述べておきたいと思います。受賞者の学生だけでなく、一般の学生の皆さんにも読書体験や教養ということに関して、少しでも参考になれば幸いです。

昨年に引き続いて、今年度も審査委員会の一人に加えていただき、審査の過程でとても楽しいひとときを過ごさせていただきました。川柳は滑稽(こっけい)あるいは諧謔(かいぎやく)、言い換えれば、ユーモア、そして既知や頓知、風刺などが盛り込まれた作品です。そこにはその作者の「心のゆとり」のようなものが感ぜられるものです。今回の受賞作品の中でも、五・七・五の短い言葉の中に豊かな広がりをおぼせる余韻を残している作品が多く、その「余韻」が受賞の「要因」になったのではないのでしょうか。今後も川柳を作っていく際には、ユーモアや機知、つまりは「心のゆとり」を盛り込むようにするとよいでしょう。そこで、その肝心の「心のゆとり」は果たしてどこから来るのか、と言いますと、それはとりわけ豊富な読書量からです。受賞された皆さんは、日頃から読書を楽しんでおられることかと思えます。読書に親しんでいなければ、今回受賞されたようなすばらしい川柳は生まれてきません。読書にはさまざまな効用があります。教養を身に付けるには、やはり読書です。

最近のキャンパス内では、あちこちで学生が携帯やスマホに夢中になっている光景を見かけます。もちろん携帯やスマホを否定するつもりはありませんが、しかし、それだけに読書の時間が減っているような気もしないではありません。携帯やスマホではたくさんの情報が入りますが、しかし、「情報」は「知識」ではあっても、「教養」ではありません。本物の「教養」は特に読書から培われます。本物の教養は本という物から来る、まさにこれぞ「本物の教養」というものです。学生の皆さんには、是非、今後とも読書を重ねていただきたいと思えます。

さらにその上に欲を言えば、その「教養」も個人的な教養にとどまるのではなく、その教養が社会に属する一人の人間の教養にまで高まって、それが社会のためになるという、そういう意味での「教養」をめざしていただきたいと思っています。私は定年退職を2年後に控えて、最近では以前読んだ本を読み返すことが多くなっていますが、そのたびに「教養とは何か」についての認識を新たにしています。最近つくづく思うことは、真の「教養」とは「素直な心」「広い心」「大きな心」を持つことではないかということです。心を大きく開いていないと、美しい景色も美しくは映りません。広い太平洋のように悠然と構えて、小さな川の流れも、大きな河の流れもすべて受け入れてあげる「寛大な心」「寛容な心」、別の言葉で言えば、「包容力」、これが「教養」というものではないでしょうか。「他人を思いやる心」あるいは「人や物を慈しむ心」と言ってよいかもしれません。私流に一言で言えば、「教養」とは「愛」です。広い意味での「愛」にはかなりません。こういう「教養」の境地に辿り着くことができたのも、40年以上にわたり、ゲートをはじめとするたくさんの本を読んできたからだと思っています。そのゲートの考え方によると、本物の教養とは「個人の一般的な教養をめざすという立場を越えて、社会に属する人間として有能な存在となり、それによって人間性を完成する」ということです。一個人としていくら「教養」があっても、それが社会的に意味を持っていなければ、そのままの「教養」でしかありません。上で述べた広い意味での「愛」がこもった「教養」でなければなりません。読書の究極的な目的も、そのような「教養」にあるのではないのでしょうか。学生の皆さんも、これから残りの学生生活において読書を通じてしっかりと学びながら心を磨き、その後、卒業して社会に出ていっても、そのまま読書を続けて、「教養ある」立派な人間となって社会に貢献していただきたいと思います。

最後に私の川柳を一つ紹介します。「川柳に 親しみめざせ 一流の人」というものです。「川柳」と「一流」をかけています。川柳あるいは読書を通じて、「広い心」「大きな心」「寛大な心」「寛容な心」でもって物事を眺めながら、川柳のようにユーモアにあふれた、「心にゆとり」のある心豊かな人生を送っていただきたいと思います。学生の皆さんの今後のますますのご健闘をお祈りして、受賞作品の講評とさせていただきます。受賞者の皆さん、このたびは受賞、まことにおめでとうございました。